

読解力の向上を目指した学習指導の工夫

～説明的文章における連続型テキストと非連続型テキストとを関連させた読解指導を通して～

魚沼市立小出小学校
松島 慎一郎

1 はじめに

これまでの読解力は、本文に書かれている内容を正確に読み取る「情報の取り出し」が重視されていたが、これからの国語学習では、読み取った内容を基に、自分の考えを書くという読むことのみで閉じない学習が大切であると考えます。また、学習の対象となるテキストは、文章のみではなく、図・表・グラフ等の非連続型テキストをも含み、こうしたテキストを理解し、利用し、熟考する力を育成しなければならない。

さらに、2009年に実施されたPISA調査の結果においても、読解力について、必要な情報を見つけ出し取り出すこと（「情報へのアクセス・取り出し」）は得意であるが、情報相互の関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結び付けたりすること（「統合・解釈」「熟考・評価」）が苦手であることが指摘されている。

一方、自学級の実態を改めて考えると、課題として以下の点が挙げられる。

- ・文章の前後の内容の読み取りについては概ねできるが、全体を見通した発問に対応できない。
- ・文章の内容と自分の考えをつなげて考えることが苦手であり、読書感想文等では、あらすじが大半を占めてしまう。
- ・図表やグラフの数値は読み取れても、そこから分かることを説明できない。

そこで、こうした現状と課題を解決するために、連続型テキストと非連続型テキストとの関係に目を向けさせるような学習指導の工夫が必要だと考えた。テキストから情報を読み取るだけでなく、テキストの構成や表現の工夫等を自分なりに解釈したり、筆者の意図を熟考・評価したりする活動を設定し、それを言葉で表現する学習活動を展開することで、児童の読解力向上を目指したいと考えた。

2 授業改善の視点

説明的文章の指導において、連続型テキストと非連続型テキストとを分割して与え、それぞれのテキストを読解させることで、テキスト相互の関係に目を向けた読みが深まると考えた。そこで、次の(1)～(3)を指導に位置付けた学習過程の工夫を行うことを授業改善の視点とする。

- (1) テキスト相互を関連させた「情報の取り出し」
- (2) テキスト相互の内容を比較したり、推論したりしながら意味を理解する「統合・解釈」
- (3) テキストにおける筆者の主張や意図を批評・評価しながら読んだり、自分の考えと比べたりする「熟考・評価」

3 実践の概要

教材名 『天気を予想する』（5年：光村図書）

年	的中央 (パーセント)
1971-1975	79.0
1976-1980	79.0
1981-1985	82.0
1986-1990	82.2
1991-1995	83.4
1996-2000	83.6
2001-2005	86.4

本単元では、連続型テキストと非連続型テキストとの関係に目を向けさせるために、上記の授業改善の視点を基に、主に次の4つの学習活動を構想した。

- ① それぞれの非連続型テキストが何を表しているかを読むこと
- ② 非連続型テキストの意味や筆者の意図を自分なりにとらえること
- ③ 全体の構成や文章の書き方について、批評・評価しながら読むこと
- ④ 上記の学習活動において、自分の考えを書く、ペアで検討する、全体で話し合うこと

まず、本文を3枚のワークシートに分け、順次提示していくようにした。その際、9枚ある資料については、必要に応じて提示するという形をとった。

本文を、教科書を使わずに教師がリライトして提示したことには次の理由がある。

- ・ 説明文の書き方のよさに目を向けさせるために、最初に「自分なら」という内容を予想させたい。
- ・ 予想させることで、興味・関心を高め、本文の内容面だけでなく、構成面にも着目させたい。
- ・ 連続型テキストと非連続型テキストのどちらか一方を隠すことで、推論する思考を働かせたい。
- ・ 連続型テキストと非連続型テキストのどちらか一方を隠すことで、テキスト相互の関係に目を向けた読みを促し、注意深く読ませたい。

第1時では、『天気を予想する』という題名から、説明文の内容を予想させた。問題提示（はじめ）—具体的事例（なか）—まとめ（終わり）に分けて内容の概略を思考させた。その後、本文の前半を配付し、予想した内容と比べながら読ませた。A児は、次のように予想した。

A児	わたしたちはテレビやインターネットを見なくても、天気を予想することはできないのでしょうか。 例えば、夕方、西の空がきれいな夕日だったら、その次の日は晴れになります。それは西の空に、雲がないため、きれいな夕日が見え、その次の日は晴れになります。 このように、テレビやインターネットを見なくても、「天気のことわざ」という方法などで、天気を予想することができるのです。
----	---

A児だけでなく、多くの児童が『天気を予想する』という題名から、理科で学習した知識を結び付けながら、自分なりの構成を考えることができた。この学習活動は、学習単位を通して、児童の興味・関心を高めることにつながった。「筆者はどのように考えたのか?」「なぜそう考えたのか?」、「早く次が読みたい!」。こうした児童の意欲的な姿勢は、学習活動における大切なモチベーションとなった。

【学習活動①】について

本文1枚目にある資料アを使って、表そのものの内容だけでなく、本文と関連させながら説明させる活動を設定した。非連続型テキストから連続型テキストへとつなげて読む、あるいは、連続型テキストから非連続型テキストへとつなげて読む。このような思考の往復をさせることによって、本文の内容そのものの理解も深まり、より正確な読みができる。児童は、ペアの友達に、表を指差しながら、本文に書かれた内容を的確に指摘することができた。アの資料のよさとして、5年ごとに区切られていることを指摘した児童もいた。

【学習活動②】について

気象レーダー等の写真（資料イ～キ）については、本文の内容から「あなたならどのような資料を使うか」と問うた。写真を使うことにより、あまり馴染みのない言葉を補うことができた。全員が最低1枚の資料を考えることができ、全体では、実際の本文に掲載されている6枚のうち、5枚を指摘することができた。児童は、それ以外にも、スーパーコンピュータや雲画像等、本文を補足する上で分かりやすくなりそうな写真を指摘した。これは、写真や表（非連続型テキスト）が本文を補う役割を果たすことが理解できているだけでなく、「こういう写真があるといい」という本文に対する自分の考えをもっていると言える。

また、本文2枚目で、資料クから本文の内容を推論する活動では、激しい雨が降る回数の増加をとらえることは概ねできていたが、グラフから読み取った内容と理由とをつなげることが難しかった。A児は次のように書いた。

A児	1時間の降水量50ミリメートル以上の発生回数の平均の数です。1976～1986年の平均は160回、1987～1997年は177回と17回の差しかなかったけど、1998～2008年は、239回とすごく多くなってから、予想することが難しいと考えたのです。
----	---

B児は、天気の話題ということもあり、生活経験を結び付けて「こうした現象は突然来るので天気予報ではお伝えすることができません。」と記述できたが、全体としては、A児のように、グラフの表題と数値を示すだけにとどまった。教師の手立てとして、「結論」「何を表したグラフか」「グラフから読み取れる数値」「自分の考え」といったパターンを事前に示せばよかったらと思う。

最後の資料ケについて、教師があらかじめ用意した「A 富士山（ことわざ）」、「B 夕焼け」、「C 虹」の3枚の写真を提示し、根拠を明確にしながら自分の考えをノートに書かせた。

A児	A → ⑨の段落に「富士山にかさがかかると雨」ということわざが書いてあるから。
----	---

本文にことわざが書いてあるので、ほとんどの児童がA児のように富士山の写真を選択した。この段階で、まとめに書いてある筆者の主張に着目できた児童は少数であった。その後、実際に筆者

がどのような写真を使ったのかを児童に提示した場面では、「自分でも天気に関する知識をもち、自身で空を見、風を感じることを大切にしたいものです。」と書かれている一文に着目する児童が増えた。特に、C児は、最初は気付かなかったが、全体での話し合いの段階で、この写真のみ筆者撮影ということ指摘し、最後のまとめに書かれている筆者の主張と関連することを説明することができた。このC児の説明は、筆者撮影のまとめの写真と最後のまとめの段落が大いに関係しているということの理解を促すことにつながった。



さらに、筆者の意図について、熟考・評価させたが、ほとんどの児童は、筆者自らが撮影した写真の意図について賛成していた。これは、自分が考えたものと筆者のものとを比較する思考を促したことによって、筆者の主張をより明確にすることになり、筆者の意図を十分に感じ取ることができたと考える。

【学習活動③】について

全体の構成や文章の書き方についての熟考・評価では、様々な考えが出された。

本単元では、非連続型テキストの工夫だけでなく、連続型テキストの文章構成にも着目することができた。例えば、

- ・ 問いの文が繰り返されていること → 問いの文が1つではないという工夫。関係する問いが繰り返されることで、おもしろく読める。
- ・ 具体的事例が複数あること → 複数あることは説得力につながる。
- ・ 非連続型テキストである資料についても、
- ・ 自分の撮った写真が使われている → まとめに関係しているので大切な写真。
- ・ グラフや表に平均が書いてある → 資料そのものにある工夫。

また、児童の振り返りカードを見ると、次のような記述が見られた。

C児	説明文を書くのに参考になりました。筆者の工夫をふだんでも活用したいなあと思いました。
D児	グラフや写真の使い方が参考になったので生かしていきたいです。
E児	資料やグラフなどがなくてあまり分からないところもあったので、今書いている説明文にもそういう所がないか確かめて分かりやすくしたいです。

説明文の読解で学んだことを、自分の作文に活かそうとしている記述である。「自分なら」という熟考・評価の問いがこうした学びを促したと考える。

【学習活動④】について

本単元では、多くの場面で友達との交流を設定した。こうした友達同士説明し合う、グループや全体で話し合うことが、自分の考えを整理することにつながり、内容理解の手助けとなった。当然のことながら、自分の考えをもつことが前提であり、書く力が不十分である児童も、交流活動を通して、説明しようと努力する姿が見られた。自分の考えを相手により分かりやすく伝えようとすることで、言葉（音声・文字）で伝える表現力の高まりを感じ取ることができた。

児童アンケートを見ると、次のような記述が見られた。

F児	自分の考えを言うことができよかったです。みんなの説明がよかったから、自分でも理解できて本当によかったです。
G児	たくさんの考えを書きこむことができました。たくさん説明したので、説明の仕方もうまくなってきました。
H児	クラス全員で意見を出して、どの資料を筆者は選んだのかを話し合ったことが楽しかった。

自分の書く力、説明する力の高まりを実感すると共に、話し合いの楽しさを感じることができていた。

4 成果と課題

- ・ 連続型テキストと非連続型テキストを分割提示し、推論させる学習活動を展開することは、自分の考えと筆者の意図を比較思考させることができ、テキスト相互の関係性をより深く読み取る上で有効である。
- ・ テキストの効果や意図を推論したり、筆者の書き方について評価しながら読んだりする学習活動は、それを自分自身に活用しようとする読みを促すことにつながる。
- ・ 「統合・解釈」や「熟考・評価」の発問を、単元のどの場面で位置付けると効果的であるのか、実践を積み重ねながら検証していきたい。

5 参考文献

- ・ 経済協力開発機構（OECD）編著、国立教育政策研究所監訳『PISA2009 調査評価の枠組み』（明石書店：2010年10月）
- ・ 文部科学省『読解力向上に関する指導資料』（平成17年12月）
- ・ 文部科学省『読解力向上プログラム』（平成17年12月）
- ・ 文部科学省HP：『新学習指導要領・生きる力』
- ・ 有本秀文編『教科書教材で出来るPISA型読解力の授業プラン集』（明治図書：2008年12月）
- ・ 須田実編著『読解表現力強化プログラム第5学年』（明治図書：2009年11月）
- ・ 瀬川榮志監修、金久慎一編著『言語活用力を高める説明文の指導 高学年』（明治図書：2010年1月）
- ・ 水戸部修治編著『小学校国語科言語活動パーフェクトガイド5・6年』（明治図書：2011年7月）